

平成 21 年 3 月 31 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2005～2008

課題番号：17510224

研究課題名（和文）クララ・ツェトキーン的女性解放思想のジェンダー視点での再考

研究課題名（英文）Rethinking on Feminist Theory of Clara Zetkin from the Viewpoint of Gender

研究代表者 伊藤 セツ（ITO SETSU）

昭和女子大学・生活機構研究科・教授

研究者番号：60073558

研究成果の概要：研究代表者は 1960 年代半ばからクララ・ツェトキーン的女性解放論を研究し、このテーマで 1984 年に博士の学位を得たが、本研究はソ連・東欧の崩壊後、公開整理された新資料にアクセスし、さらにそれらを用いた新たな研究を意識して行われた。折りしも、本科学研究費助成期間内に、ツェトキーンの生誕 150 年（2007）と没後 75 年（2008）が重なり、生誕 150 年のシンポジウムに招待報告の機会も得たので、モスクワの RGASPI 及びベルリンの SAPMO アルヒーフに赴いてツェトキーン関係の原資料を収集し、1960 年代には視野の外にあった彼女の理論のジェンダー視点での再考、客観的位置づけを行った。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	1,400,000	0	1,400,000
2006年度	1,100,000	0	1,100,000
2007年度	500,000	150,000	650,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
総計	3,500,000	300,000	3,800,000

研究分野：複合新領域

科研費の分科・細目：ジェンダー・

キーワード：（1）クララ・ツェトキーン （2）女性解放思想 （3）フェミニズム （4）ジェンダー （5）アウグスト・ベーベル （6）ドイツ社会民主党の女性運動 （7）ローザ・ルクセンブルク （8）国際プロレタリア女性運動

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究の学術的特色と意義・独創的な点

現代フェミニズム（本研究ではフェミニズムという用語を、日本語の女性解放論と同義と定義する）は、いわゆる「第二期フェミニズム」を経過して、ポストモダンの「第三期フェミニズム」の時代に入っている。欧米中心のフェミニズムの時代は終わって、ポストコロニアルの視点から、グローバルフェミニ

ズムへと大きく転換した。21 世紀の国際情勢は、これまで目が向けられなかった地球上のすべての地域の女性に、さまざまな学問領域からも、また国連の諸機関からも、運動の面からも光が当てられている。

そうした研究の発展の一方、国際的にも 18 世紀からの西欧女性解放運動と新たなフェミニズムの接点や、ジェンダー論の到達点との継承の問題が、研究上手薄となりがちであ

る。

本研究の学術的特色と意義・独創的な点は、19世紀後半から20世紀の初頭、ドイツを中心としながらも、政治亡命者の多かったフランスに住んで、国際的視点を持ち、アメリカ合衆国の女性と結んで、「国際女性デー」を創始し、晩年はロシア革命後のモスクワでアジアを視野に入れながらインターナショナルの諸矛盾の中に生命を終えたクララ・ツェトキーンという女性の思想的・理論的足取りを追うことである。

本研究による新しい視点での再考、すなわち、当該研究の意義は、21世紀以降の現在から将来にかけて、おそらく日本では誰も着手せず、忘れ去られるであろう歴史的事実とクララ・ツェトキーンの思想・理論を、新しい視点から明らかにして後世に残すということである。

(2)国内外の研究状況の背景

国内外の関連する研究の中での当該研究の位置づけとしては、私は、国内では、ソ連・東欧社会主義の崩壊以降、特に2000年代に入って、『ドイツ女性の歩み』(河合節子ら編、三修社、2001)、『岩波女性学事典』(井上輝子他編、岩波書店、2002)、『概説フェミニズムの思想史』(奥田暁子ら編、ミネルヴァ書房、2003)の等の企画・出版に際して、クララ・ツェトキーンの研究に関連箇所を、執筆・担当してきた。またクララが影響を受けたアウグスト・ベーベルをとりあげ『ベーベルの女性論再考』(昭和女子大学女性文化研究所編、御茶の水書房、2004)を責任編集した。しかし、私以外、フェミニスト思想史家もジェンダー論者も、日本では依然としてクララ・ツェトキーンを取り上げる気配はないか、意識にも上らない(例えば、本研究の終りの年に出された姫岡とし子他編『ドイツ近現代ジェンダー史入門』青木書店、2009、を見よ)。

国外に目を向けると、私は、統一ドイツで生き延びた少数の研究者と連絡をとりながら、日本においても新たな研究で呼応する必要性を感じていた。クララ・ツェトキーンそのものについては、1990年代前半フランス人、バディア・ジルベールの手で、フェミニスト：クララ・ツェトキーンとしての新しい伝記(Badia, Gilbert, Clara Zetkin, *feministe sans frontieres*, Les Editions Ouvrieres, 1993, Paris.)が出版され、ドイツ語に翻訳されている(Florence Herve und Ingebourg Nodinger, Clara Zetkin, *Eine neue Biographie*, Dietz Verlag, 1994, Berlin.)し、ベルリンのクララ・ツェ

トキーン・ハウスから、新資料を用いた短い伝記も出されている(Dornenburg, Manuela, Clara Zetkin, *Eine Annäherung*, Edition Korona, 1997, Birkenweder.)

またクララが影響を受けたアウグスト・ベーベルの女性論に関しては世紀の変わり目に、Men's Feminismの視点での研究書もUSAの研究者によって書かれていた(Lopes, Anne & Roth, Gary, *Men's Feminism, August Bebel and the German Socialist Movement*, Humanity Books 2000 New York)し、2003年には、従来の視点とは全く異なるドイツの教授資格申請論文(Puschnerat, Tania, Clara Zetkin, *Bürgerlichkeit und Marxismus, Eine Biographie*, Klartext, 2003, Essen.)が出された。その論調はドイツでは論争的となっていた。このことは、私の研究への刺激となっていた。

以上の点が背景にあつて、当該研究が完成をみれば、クララ・ツェトキーンの生誕150年にこれらの分野に、日本からの斬新な発信・貢献ができると考えていた。

2. 研究の目的

科学研究費の交付を希望する期間の、2007年は、クララ・ツェトキーンの生誕150年に当たった。ソ連・東欧の崩壊の後、1990年代の半ばからロシア・ドイツの旧アルヒーフが新しく未印刷資料を公開している。本研究を取り組むに当たり、生誕150年前後にはクララをはじめとする関連研究が国際的にも深められ、多くの文献が刊行されることが予測された。この4年間、当該研究に従事して、これら海外のアルヒーフとコンタクトをとって過去の未印刷関連資料を読み、新たに刊行されるであろう文献に目配りして、現代フェミニズム・ジェンダー論の到達点から、クララ・ツェトキーンの女性解放思想の再考・再評価を行うことが本研究の目的であった。

3. 研究の方法

文献研究と現地調査である。

(1)文献をwebサイトで検索し、国内の図書館で文献収集する。法政大学大原社会問題研究所図書室等を利用してこれまで欠落していた国内で入手可能な文献を閲覧・コピーする。(2)ロシアの研究者を介して、モスクワのRGA SPI(ロシア国立社会・政治史研究所)アルヒーフで、ソ連崩壊後公開された未印刷文献を閲覧し、クララが人生の最後を終えたモ

スクワ近郊アルハンゲルスコエのサナトリウムを訪問・調査する。

(3)ドイツ統一後開放されたベルリンのSAPMO アルヒーフ(Stiftung Archiv der Parteien und Massenorganisationen der DDR im Bundesarchiv)でクララ・ツェトキーンの遺作を調査する。

(4)2007年の没後150年のコロッキウムに参加して、報告者と交流し、最近のクララ・ツェトキーン研究動向を把握して盛り込む。

4. 研究成果

(1) 年度ごとの主な成果

①初年度 2005年度は、これまで寄り付かないでいたモスクワのRGASPIに出かけ、RGASPI主任研究員ヴァーレリー・フォミチェフ氏の案内とご好意で、ソ連崩壊後公開されたクララ・ツェトキーンの資料の一部電子化や、またRGASPI所蔵の彼女のオリジナルな写真の使用も認めていただいた。

2005年11月25日にはフォミチェフ氏を女性文化研究所の第101回研究会に招待してRGASPIに関する講演「新時代のロシアのアルヒーフの国際的役割」を実現させた。同日、私も「クララ・ツェトキーンとロシア」と題する報告を行った。

これら第1年度の成果は、昭和女子大学女性文化研究所『Working Paper No. 21』に「クララ・ツェトキーン新研究 第1報」としてまとめた。

②第2年度 2006年度は、ベルリンの「連邦アルヒーフ」内のSAPMOを訪問した。私はSAPMOの前身IMLには1970年代終わりから1980年代に何度か訪問しているが、今回は、統一ドイツ以降に公表されたクララのナッハラス(遺作)の全貌資料を、SAPMOの前身を熟知しているProf. Dr. ロルフ・ヘッカー氏に助けをいただいで、コピーを取ることができた。

ヘッカー氏とはその後も東京の国際会議で交流し、生誕150年の招待の仲立ちをしていただいた。

SAPMOで収集した資料を用いた報告を2007年1月23日、昭和女子大学女性文化研究所の第105回研究会で「私信から読むクララ・ツェトキーン晩年の生活—SAPMOに残された息子Maximと二人の妻、孫への手紙を通じて—」と題して報告し、第2年度の成果は、『Working Paper No. 25』に「クララ・ツェトキーン新研究 第2報」としてまとめた。

③第3年度、2007年度の7月は、クララの生誕150年のコロッキウムの招待講演で再度ベルリンに行った。ここでの私の報告(Clara Zetkin's Beiträge zur

Frauenemanzipationstheorie)は、ドイツの関連雑誌に掲載された(後載〔雑誌論文〕③)あと、2008年にベルリンのディーツ社から出版された『クララ・ツェトキーンとその時代』という単行本に収録された(後載〔図書〕①)。

第3年度の成果は、昭和女子大学女性文化研究所第111回研究会(2007年12月18日)に「クララ・ツェトキーン生誕150年の終わりに」と題して報告し、また『Working Paper No. 28』に「クララ・ツェトキーン新研究 第3報」としてまとめた。

④第4年度、最終年度の2008年度は、6月20日がクララ・ツェトキーン没後75年であり、同じ年度内の2009年1月15日は、クララの友人ローザ・ルクセンブルクの虐殺90周年であった。この関連では2009年1月ベルリンでのローザ虐殺90周年の催しがあり、私は「ローザ・ルクセンブルクとクララ・ツェトキーンの関係」と題した報告をして欲しいと招待されたが、1月に日本を抜け出すことは校務からして不可能で断り、2009年3月発行の『女性文化研究所紀要』No. 36に「研究ノート」にこのテーマで執筆するにとどまった。また、2009年1月30日に、昭和女子大学女性文化研究所第115回研究会で「バーベルとツェトキーン—USAのLopesとRuthの研究から—」と題して報告し、第4年度の成果は、昭和女子大学女性文化研究所『Working Paper No. 31』に「クララ・ツェトキーン新研究 第4報」としてまとめた。

(2) 内容における成果

①本研究で科学研究費助成を申請する準備段階から、クララ・ツェトキーンの、ライプツィヒにおける少女時代・教育期の成長を、1960年代から80年代の私の研究で見落としていた点、不明であった点を補足し、パリ亡命時代についても同じ作業をして、本研究に備えた。そこから初期のクララ・ツェトキーン的女性解放論の特徴を再考した(後掲〔学会発表〕②、〔雑誌論文〕⑨)。

その結果、ドイツ社会民主党のなかでの彼女の女性解放論の位置が、現代フェミニズムとの対比で従来よりは明確になった。

②初期の女性解放論からドイツ社会民主党、第二インターナショナル、第三インターナショナルにおける女性解放論へと時代に対応して発展するが、最晩年1930年代冒頭、「国際女性運動の理論と実践の研究部門の当面の活動計画」を構想し、歴史的な女性運動の継承から、東方・イスラム・非資本主義圏の広がりにおいて女性問題の把握の必要な論点を明示した(後掲〔雑誌論文〕②)。

③晩年の生活RGASPIアルヒーフおよびSAPMOアルヒーフでのナッハラスから、レ

一ニン没後のソ連での彼女の政治的位置を十分ではないが探ることができた。ブーリン、トロツキー、スターリンとの交流において、スターリンへの距離のとり方で苦慮している様子が浮かび上がる。

私的生活面では、次男コスチャのローザとの別れ、長男マクシムのハンナとの離婚と孫ヴォルフガングの養育費の問題と、クララ自身のツェンデルとの離婚の延期等、人間クララの知られざる側面を明らかにすることができた。このことから、2003年のプチュルナートの伝記におけるクララ像はかなり一面的なものではないかとの仮説が立てられる（後掲〔雑誌論文〕⑤⑥）。

④これまで手がけていなかったシュツットガルト時代のクララ・ツェトキーンの文学・文芸評論に目を向けた。USAのロイターサンの研究を先行研究としてこの問題を考察するに、彼女は、この領域においてもドイツ社会民主党のなかで伝統と古典からの批判継承・変革という点で、独自の見解を持つものであることが示された（後掲〔雑誌論文〕⑦、〔図書〕②）。

⑤当初の計画にはなかったものであるが、クララ・ツェトキーンとローザ・ルクセンブルクの関係を取りあげた。現在、クララ・ツェトキーンは、一般に女性運動においては「国際女性デー」の創始者として、ドイツおよび国際社会革命運動史の研究者のあいだでは、ローザと反戦運動の行動をともにした同志として知られている。科学研究費女性の最終年度間の2007年6月20日がクララの没後75年、2009年1月15日が、ローザ虐殺90年だったこともあり、クララとローザの関係を調べられる範囲で調べることが必要との思いに駆られ、このテーマを取りあげた。

両者の関係は、クララの次男コスチャがローザの愛人の一人であったこと、政治的には、第一次世界大戦とともに反対し、ドイツ社会民主党を離れてスパルタクスグループに名を連ねたこと、ロシア革命に関するローザの批判に関するクララの態度、ドイツ革命の短い期間ローザが虐殺されるまでの交流をあげることができる。このうち、本研究期間に、ベルリンでのコロッキウムでの知見や、ローザの手紙やSAPMPに残されたクララの手紙等から、これまで解明されていなかったことが明らかになった（後掲〔雑誌論文〕①）。

(3) 目的に対して全体としての知見

この4年間、モスクワのRGASPI、ベルリンのSAPMOとコンタクトをとって過去の未印刷関連資料を読み、この間に刊行あるいは新たに入手した文献を用いて、現代フェミニズム・ジェンダー論の到達点から、クララ・ツェトキーン的女性解放思想の再考・再

評価を行うことが本研究の目的であった。

ここで問題になるのが、フェミニズム、ジェンダーという外国語と、その日本への導入と、その意味内容・定義のずれを整理する必要が生じたことである。

この問題は、クララ・ツェトキーンのドイツ語と日本語への翻訳という関係では解決できず、USAの研究者の英語での用語法を媒介して、それに示唆されて、筆者なりにこれまでの筆者の理解をパラダイム転換して、再定義しながら解明されなければならなかった。

それによれば、クララ・ツェトキーンフェミニズム・ジェンダー論は、男女関係では、労働者階級の女性の当時の生活に根ざして現実的でむしろ非イデオロギー的であり、階級関係では、諸階級の女性への目配りの中でも、特に労働者階級の女性については、労働者とその家族・妻・子どもを含み、階級の捕らえ方が個人単位ではないという点で、現代フェミニズムとスタンスを異にするということができる。女性の経済生活への参加、経済力の必要性を最上位におきながら、現実の経済関係から決して単純ではない。

その意味では、階級の廃絶（社会主義）が男女平等への道としながらも、男女関係では女性性を否定しないフェミニズムであり、女性性を利用した階級廃絶の運動論を展開したということができる。

(4) 残された課題

ドイツ革命の中での行動、および第三インターナショナルの中での最晩年の位置づけが依然として研究が及ばず手薄である。さらに女性解放論だけでは捕らえきれない全体像を理解する必要がある。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計9件）

①伊藤セツ, クララ・ツェトキーンとローザ・ルクセンブルク, 昭和女子大学女性文化研究所紀要, No. 36, 2009, 33-56. (査読有)

②伊藤セツ, (研究ノート) クララ・ツェトキーンの東方・イスラム・非資本主義圏の捕捉, 昭和女子大学女性文化研究所紀要, No. 35, 57-70, 2008, (査読有)

③Ito, Setsu, Clara Zetkin in ihrer Zeit- für eine historisch zutreffende Einschätzung ihrer Frauenemazipationstheorie, *JahrBuch für Forschungen zur Geschichte der Arbeiterbewegung*, 2007/III, 2007, 19-25, (査読無)

④伊藤セツ, クララ・ツェトキーンとその時代一生涯150年記念コロッキウム(ベルリン)によせて一, 昭和女子大学近代文化研究所紀要学苑, No. 804, 36-45, 2007. (査読有)

⑤伊藤セツ, クラーラ・ツェトキーンと次男コスタ&ナジャ・ツェトキーン夫妻の文通, 昭和女子大学近代文化研究所紀要学苑, No.802, 33-46, 2007. (査読有)

⑥伊藤セツ, クラーラ・ツェトキーン晩年の私生活の一断面—ドイツ連邦文書館 SAPMOに残された孫ヴォルフガングへの手紙を通じて—, 昭和女子大学近代文化研究所紀要学苑, No.797, 2-19. 2007. (査読有)

⑦伊藤セツ, <クラーラ・ツェトキーンと文学>をめぐる覚書, 昭和女子大学女性文化研究所紀要, No. 34,49-58. 2007. (査読有)

⑧伊藤セツ, クラーラ・ツェトキーン研究におけるロシア—モスクワでの RGASPI アルヒーフ利用を中心に—, 昭和女子大学女性文化研究所紀要, No. 33, 53-63, 2006, (査読有)

⑨伊藤セツ, クラーラ・ツェトキーンの初期女性解放思想, ロバート・オウエン協会年報 No.30, 76-88,2005, (査読無)

[学会発表] (計 2 件)

① Ito, Setsu, Clara Zetkin "in ihrer Zeit"-Grundlagen einer objektiven Einschätzung ihrer Frauenemazipationstheorie, Ein Kolloquium anlässlich des 150. Geburtstages von Clara Zetkin, 6. Juli 2007, Räumen der Rosa-Luxemburg-Stiftung, Berlin, Germany.

②伊藤セツ, クラーラ・ツェトキーン初期女性解放思想の形成, ロバート・オウエン協会第 115 回研究集会, 2005.6.18, 東京四谷プラザ.

[図書] (計 2 件)

①伊藤セツ, Plener, Ulla (Hrsg.), *Clara Zetkin in ihrer Zeit, Neue Fakten, Erkenntnisse, Wertungen* 246p.

(伊藤分担執筆の論文題名, Clara Zetkin in ihrer Zeit- für eine historisch zutreffende Einschätzung ihrer Frauenemazipations-theorie 分担部分 22-27) Dietz Berlin, 2008.

②伊藤セツ, 昭和女子大学女性文化研究所編, 女性文化研究叢書第 6 集 女性文化と文学, 248p.

(伊藤分担執筆論文名, クラーラ・ツェトキーンの文学・芸術評論, 分担部分 131-154), 御茶の水書房, 2008,

[その他]

(1) 雑誌論文以外に発表したものは下記のとおり.

①「クラーラ・ツェトキーン新研究 第 1 報」昭和女子大学女性文化研究所『Working Paper No. 21』2006 年 3 月.

②「クラーラ・ツェトキーン新研究 第 2 報」

昭和女子大学女性文化研究所『Working Paper No. 25』2007 年 3 月.

③「クラーラ・ツェトキーン新研究 第 3 報」昭和女子大学女性文化研究所『Working Paper No. 28』2008 年 3 月.

④「クラーラ・ツェトキーン新研究 第 4 報」昭和女子大学女性文化研究所『Working Paper No. 31』2009 年 1 月.

(2) 学会等以外の研究会等で発表したものは次の通り

①「クラーラ・ツェトキーンとロシア」女性文化研究所の第 101 回研究会, 2005 年 11 月 25 日.

②「私信から読むクラーラ・ツェトキーン晩年の生活—SAPMOに残された息子 Maxim と二人の妻, 孫への手紙を通じて—」昭和女子大学女性文化研究所の第 105 回研究会, 2007 年 1 月 23 日.

③「クラーラ・ツェトキーン生誕 150 年の終わりに」昭和女子大学女性文化研究所第 111 回研究会, 2007 年 12 月 18 日.

④「クラーラとローザ—没後 75 年と虐殺 90 年によせて」神奈川県職労連女性部学習会, 2008 年 11 月 22 日.

⑤「昭和女子大学『女性文庫』からひろがるアウグスト・ベーベル研究の妙味」昭和女子大学文化史学会第 22 回大会, 2008 年 12 月 13 日.

⑥「ベーベルとツェトキーン—USA の Lopes と Ruth の研究から—」昭和女子大学女性文化研究所第 115 回研究会, 2009 年 1 月 30 日.

(3) 科学研究費助成準備段階での雑誌論文

①伊藤セツ, クラーラ・ツェトキーンのライプツィヒ時代 (1872-1880), 大東文化大学経済論集 Vol.84, No.1.19-34, 2005.

②伊藤セツ, 研究ノート: クラーラ・ツェトキーンのバリ時代 (1882-1890), 昭和女子大学女性文化研究所紀要, Vol.34, 43-55, 2005.

(4) ⑤上記 [雑誌論文] ①②④⑤⑥⑧⑨と [図書] ①②, 及び [その他] の(2)の⑥と(3)の①②の 12 編を, 『報告書』として冊子に印刷した. 配布可能である.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

伊藤 セツ (ITO SETSU)

昭和女子大学・生活機構研究科・教授

研究者番号: 60073558

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし